

# 幼児のみたて行動に対する理解の発達

井上洋平

本研究では、みたて行動を扱った先行研究の多くが特定の心理機能（例えば、シンボル理解など）を検討するために限られた状況の中で行われてきたことを踏まえ、みたて行動を介して子どもが経験する世界を実態に即して明らかにすることを目的とした。

第1章では、先行研究の到達点と課題を整理する中で、本研究の目的に対して以下の3点が考慮されたアプローチの必要性について提起された。それらは、第1に子どもが経験する多様な状況を捨象せず検討対象に含めること、第2に自他の同型性だけでなく自他の個別性を考慮すること、第3にシンボル理解をはじめとする個別の心理機能に関する知見から幼児がみたて行動を介して経験する内容を考察することであった。その上で、第2章から第4章にかけての実証的研究を通じて取り組む具体的な検討課題についても整理された。

第2章では、2歳6か月から4歳11か月までの幼児を対象に、前置きのない他者のみたて行動に対する反応とシンボル理解および両者の関連が実験によって検討された。そして、みたて行動に対する反応とシンボル理解のいずれにおいても3歳半ば頃を境にした変化が認められた結果を踏まえて、前置きのない他者のみたて行動に対する幼児の理解の発達について議論された。

第3章では、2歳5か月から3歳5か月までの幼児を対象に、自他間で「ふりのシナリオ」が共有されていない場面における他者のみたて行動に対する理解と遂行要求に対する反応の関連が実験によって検討された。実験の結果、実験者のみたて行動におけるシンボル理解を確かめる質問には回答するものの、そのみたて行動を自ら遂行するよう要求されると拒否をするということが一定数認められた。この点に関しては、自他の個別性の観点から、「理解すれども自らは行わない」という理解と遂行の関係として考察された。

第4章では、2歳5か月から3歳4か月までの幼児を対象に、日常場面におけるみたて行動の展開が観察された。その結果、子どもが多様な状況の中でみたて行動を経験しているという事実が確認された。そして、第2章や第3章をはじめとする個別の心理機能に関する実験研究の知見に基づいて、各観察事例における幼児の理解が考察された。

第5章では、みたて行動の包括的検討を試みた本研究の成果と課題、そこから得られる保育や教育への示唆が議論された。